



TITLE:

Factors Affecting Body Image of Malaysian College Students(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Sai, Akira

CITATION:

Sai, Akira. Factors Affecting Body Image of Malaysian College Students.
京都大学, 2019, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21894>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（地域研究）	氏名	佐井 旭
論文題目	Factors Affecting Body Image of Malaysian College Students （マレーシア人大学生のボディイメージに影響を及ぼす諸因子）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究はマレーシアの大学生が持つボディイメージ（身体像、身体観）が、民族性、宗教、メディア、現代のインターネット／ソーシャルメディア（SNS）等の様々な要因によって、どのように影響されるかを明らかにすることを目的とする。</p> <p>第1章（Introduction）では、マレーシアにおける肥満の問題と、肥満の背景としてボディイメージを研究する意義について説明した。その上で、現代のソーシャルメディアがボディイメージに与える影響を明らかにする新しい研究の必要性を論じ、研究の目的を述べた。また、同国では成人後に肥満が急増することや、メディアの影響は特に若年層に大きいことから、大学生のボディイメージに着目することとした。</p> <p>第2章（Modern Comprehension of Obesity: Review of Body Image Studies）では、ボディイメージに関する先行研究をレビューした。初めに、ボディイメージがそれぞれの人の中で形成される社会学的・心理学的背景と、それが肥満のような健康問題として現れることについてまとめた。続いて西洋では女性の痩身、男性の筋肉質が理想像とされており、この理想像がアジアにも広がっていることを述べた。そして現代ではメディアがボディイメージの形成に強い影響を与えるようになっており、研究関心がインターネットやソーシャルメディアに向けられていることを論じた。マレーシアでは、民族によるボディイメージの違いが示唆されてきたものの、先行研究は限られていることを指摘した。</p> <p>第3章（Regional Contexts in Malaysia）では、マレーシアにおける地域特性をまとめた。近年の経済成長に伴う生活習慣の多様化、伝統的な食習慣から西洋的な食生活への変化、肥満の増加などについて詳しく述べた。さらに伝統的な価値観や、現代のライフスタイルが、いずれも肥満の因子となりうることを述べた。最後に、若年成人層でのSNSの利用状況やその負の側面についての先行研究をまとめた。</p> <p>第4章（Body Image Perceptions and Obesity Prevalence among Rural College Students: Comparative Study in Perlis and Sabah）は、マレーシア国内で最も州の世帯収入が低いペルリス州カンガー（N=75）とサバ州コタキナバル（N=86）において、大学生に身長・体重、肥満罹患率、そしてボディイメージとしての自己身体の自覚などを調査した。身長と体重から算出した体格指数（BMI）に基づけば、両州においてマレー系大学生に最も肥満（BMI ≥ 30 kg/m²）が多いという民族間差がみられた。過体重（BMI ≥ 25 kg/m²）とされた大学生のうち、70%以上は自身が肥満であると自覚しており、</p>			

他者からの評価を気にしていると回答した。また大学生の80%以上が、身体を変えようとする動機として、メディアの影響があると認識していた。

第5章（Factors Affecting Body Image Perceptions of Female College Students in Urban Malaysia）では首都クアラルンプールにある3大学に属する371名の女子大学生を対象に、ボディイメージ尺度（Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-4、Objectified Body Consciousness Scale）と民族性、メディア利用などに関する質問票調査を行った。単純集計した結果では、マレー系、華人系、インド系という主要三民族間におけるボディイメージ尺度の違いがみられたが、多変量解析をした結果では民族による差は消え、むしろインターネットやSNSの利用時間や「友達」・「フォロワー」の数が強い因子であった。また対象者達は、痩身が理想的な身体であると考えている傾向が強かった。このことから、ソーシャルメディアの発展が、女子学生のボディイメージ形成に重要であることが明らかになった。

第6章（Factors Affecting The Drive for Muscularity of Male College Students in Urban Malaysia）ではクアラルンプールの2大学に属する161名の男子大学生を対象に、ボディイメージを扱った質問票（Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-Male、Drive for Muscularity Scale）と民族性、メディア利用などに関する質問票調査を行った。全体的にみれば筋肉質を理想的な身体として認識している傾向が強かったが、多変量解析をした結果、華人系の大学生はこの傾向が弱かった。また女子と同様に、インターネットやSNSの利用がボディイメージに影響を及ぼしていた。このように男子の場合もメディアの影響が大きいことが明らかになったが、華人系では身体よりも頭脳を優先する伝統的な価値観が影響している可能性も論じた。

第7章（General Discussion and Conclusions）では、まず本研究と先行研究を比較して、マレーシアの男子大学生・女子大学生は西洋的なボディイメージに近い身体理想を持つことを論じた。また、先行研究ではマレーシアでは民族ごとにボディイメージが異なる可能性が指摘されてきたが、クアラルンプールにおいてはむしろメディア、特にSNSの影響が強いことを論じた。本研究は、マレーシアのボディイメージ形成にSNSが影響を及ぼしていることを解明した初めての研究である。この結果から、今後マレーシアの保健政策等においては、メディアとくにSNSとの関わり方に注意することが重要であることを提言した。

(論文審査の結果の要旨)

ボディイメージは、過食や拒食という摂食障害や、過度な運動への依存症といった健康問題に深く関わることから医学で研究されていると同時に、理想とする体型が国や場所、時代によって異なることから文化心理学分野でも研究されている、学際的な研究領域である。マレーシアは、アジアの中で最も肥満が多いことが社会問題化していると同時に、多民族性や急速な経済発展でも知られることから、学際的なボディイメージの研究をすることは地域の理解と健康増進のために重要である。しかし、同国における先行研究の数は限られているため、本論文はマレーシアでボディイメージの研究を行ったということ自体に学術的に高い意義があり、その結果として様々な新しい知見がもたらされた。

本研究の優れた点は以下にまとめられる。

第一に、先行研究で用いられてきたボディイメージの尺度を用いて、痩身を理想とする考え方が内在化しているかを調べたところ、クアラルンプールの女子大学生における値は、欧米人に匹敵するものであることが明らかになった。この尺度は、特にメディアで流れる情報が内在化した程度を測るものである。つまり、マレーシアの女子大学生がメディアを通じて、痩身を理想とするようになっていることを明らかにしたものであり、これは重要な発見である。

第二に、男子大学生では、筋肉質（たくましさ）を希求する程度についての尺度が、やはり欧米男性や欧米居住のアジア系男性に匹敵するものであることを明らかにした。女子の結果と合わせ、マレーシア大学生のボディイメージにおける理想は、これらの尺度で見ると、痩身女性・筋肉質男性という欧米と同様であることを明らかにしたものであり、これは重要な発見である。

第三に、女性、男性のそれぞれについて、ボディイメージに影響する因子として、年齢、民族性、宗教、都市居住歴、テレビ利用時間、インターネット利用時間、Facebookにおける「友達」の数、Instagramにおけるフォロワーの数などのデータを集め、多変量解析によって、有意に影響する因子を特定したことである。特に、マレーシアにおいてFacebookやInstagramを因子に加えた研究はこれまでになかったが、結果としてこれらが有意な影響を及ぼすことを明らかにしたことは斬新である。また逆に大学生の間では、民族性による違いは相対的に小さかったことも重要な発見である。

本研究は、社会の情報化が進む現代において、斬新な視点に立った時宜を得た研究であり、そして地域研究にボディイメージの理論と手法を導入した画期的な研究でもある。そして肥満をはじめとする社会問題にも大きな貢献をもたらすものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と

認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。